

あったため、量産中に万一マイクロトランスファープレス機が故障したら生産ラインが止まってしまうので、予備用にもう1台つくりました。依頼されたお客さまが視察に来られたとき、わざわざ専用機をつくってくれたことはもちろん、2台を製作したにもかかわらず請求書には1台分の費用しか計上されていないことに驚かれ、「ここまで万全を期して仕事をしてくれるのか」と感謝いただき、またご安心いただき、その場で以後10年以上は発注が続くとのことのお約束をいただきました。

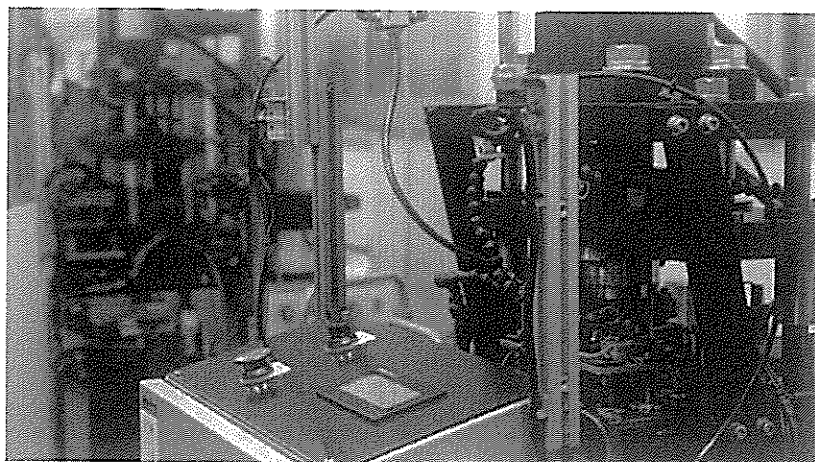
モノづくりで大切なのは行儀と服装

現在、同社の社員は派遣社員も含めて40人。そのうち9人が技能実習生のベトナム人だ。同社は15年前から外国人技能実習生を受け入れている。

私も若い頃にヨーロッパで生活した経験があるので異国に住む心細さはよくわかります。遠い日本までよく来てくれたなという思いで受け入れています。技能実習生には日本語教育をしてから、徐々に加工現場の作業を教えます。最初に計測から始め、次は不適合品の選別、手直し、そしてプレス加工という順序で作業を覚えてもらいます。プレス加工の基本作業を覚えたら、板金が鍛造のいずれをメインとするかを決めたくて、さまざまな業務を担当してもらいます。気の強い人は鍛造、神経が細やかな人は板金に向いている傾向がありますね。

外国人技能実習生には寮を用意している。ときに様子見で寮におやつをもって行くことを繰り返していると、実習生が故郷の料理をふるまってくれたりする。女性らしいアットホームな感覚の経営だ。

外国人技能実習生には生活環境にも目を配っています。いろいろと世話を焼くのでほかの会社で技能実習する外国人より窮屈かもしれませんね。また、職場ではまず挨拶と身だしなみを教えます。工場内



自社で開発した冷間鍛造・板金プレスの複合プレス機「マイクロトランスファープレス機」

の作業環境はもちろんのこと、日本人であれ外国人であれ行儀と服装が整っていないければ高精度な部品はつくれないと信じているからです。

目指すはデジタルと匠の技の融合

独自に構築した精密冷間鍛造、板金プレス、金型設計の技術をベースに試作から量産化サポートまでを手がける同社に今後の目指す方向を聞いた。

モノづくりのグローバル化はますますスピードアップされています。例えば、これまで年単位で得ていた情報が月単位、週単位で取得できるようになっているためスピード感はますます重要です。その要として当社もモノづくりのデジタル化をさらに進めていきますが、単にデジタル技術だけに注力しても欧米や大企業にはかないません。ほかが真似できない匠の技を伝承しながらデジタル化を進めることで独自の技術・技能を発展させていかなければなりません。それが競争力になっていくと思います。

ふとしたきっかけからチタン製の整形インプラント部品の試作・開発を始めて新規市場として医療分野をうかがったり、電気自動車時代を感じとった瞬間から自動車部品の受注を抑えたりと果敢に経営の舵を切る岡室社長。その経営感覚はまったくの素人から登りつめた異色の経歴だからこそ発揮されるのかもしれない。

(編集部)